

遠と旅 足と行

四月六日 文科四年(但此時は未だ三年半)地理選修の者六名は、西村先生に御願ひして、鎌倉から江の島の方へ、連れて行つていた、きまきた。ほかほかさす春の日、試験のすんだあつた。ノートは未だからつぽ。圓覺寺に禪の滋味

を味つてから、鶴ヶ岡八幡宮の前に出ました、左手の梅の林が丁度盛りでした、曰く「左膝をまげ足を前に出し体を前に倒せの様ですれ」つて、本當に。頼朝公御幼少の折の云々、さ云ふ事をも誰か云ひ出して又ふき出しました、それから由井ヶ濱邊のさすらひあるき、打ち寄せる波のメロデー、自分等の心さが何所かで一所になつて、薄い霞の中で渦を巻いて美しく歌ひ合つて居る様に思はれました、江の島では「かき」の御馳走になりました、高い所から眼の下に稚兒ヶ淵を見ながら、遙かに目を地平線上に移した時に……何て私達は幸福なのでせう!」貝の指輪も御座います、貝のボタンは如何でございますか、筆立てかざし色々ございます、よつていらつじやい」長い出女の赤前垂の行列と、この浴せ掛けにはふき出さるを得ませんでした。こゝらの人の算術は「人は金」といふのでせうと誰やらの聲、遊行寺から藤澤の驛に出て歸つたのは八時頃、片瀬頭で小さな會に移りました。

五月五日 文科三年 國府臺に遠足す、同行十一人、岡の上の眺望に市川土堤の道邊に、心行く迄春の郊外の趣を吸収して歸りました。

四月二十一日 四年 舊級主任佐藤先生と廿人ばかりで、田島ヶ原に行く、櫻草を目がけて行つたのに大きな制札。けれど目をさへた。佐藤先生

世を渡る道もかくこそたのしさにそぞろ心のまゝのつぎはし
こよ子

松風の音に心をすましてそほ、えむ乙女のしろつばきかな
きみ子

母人を朝まだきより騒がして來ぬれど友のみえぬぞかなしき
しな子

馬にのつてかけてみたく心地しぬかつしかの原青あらしふく
潤子

野の人に道さふ君のうしろかげものがたりめき美しきかな
四月二十九日 文一 戸田ヶ原へ 朝からの烈しい風の中を、文一の内の十六人は、河崎先生に御つれいたなき、他に先生の御連れの方の十二三人と御一緒に、戸田が原へ参りました、原の一隅に輪を描いて座つた二十五人は、先生の御話を伺つたり、眼を閉ぢてじつと風の音に聞き入つたり、思ひ思ひに摘み草したり、楽しい、そして意義のある幾時間かを送る事が出来ました。
風の日、に始めての遠足をした思ひ出に、銘々が三束づつ持ちかへつた櫻草が、花の寮の庭に植えてあります。
五月三十一日 文二 日黒へ 強めてのお願ひをきいて下すつた垣内先生と、二十人ばかりで青葉の日黒を訪ひました。折からの雨に兒童樂園の講堂にふりこめられて、はからずも食養法の御話を

ぎるもの、一つない廣野原に坐はつて、物語るこゝは限りなく嬉しかった、天も地もすべてがあなを、そして人々の心も青春の歡びにみちて居た、埼玉女子師範で御馳走になつて歸つたのは八時一寸すぎ。(文四の一人)

四月二十一日 文二地理部 西村先生をこめて、十人のグループが、綾瀬堤の長閑さに、心ゆく迄話してゐました、なげ出した足の邊り、真菰はもうのび揃つてゐて、豊かに水がざりまいてゐます。遙か向ふを荒川行の河蒸汽が、花見の人を満載して通ふのを、遠い世のもの、様にも考へてゐた程しみじみした半日でございました。

四月二十三日 文四地理部 江の島の御禮に伺ひました所、直ぐに此の相談がまごまごりました、場所は日野からもぐさ園と、けれど共六の朝生憎小雨が降りましたので、ためらつて居りました所が、先生が態々舎へ御出で下さいまして、押上から電車で江戸川堤へお花見にまゐる事になりました。同行七人、何所でも奇妙な假裝行列を見受けまして、議論が澤山出ました、押上までの電車さへ凡そ三十分も待たなくてはなりません、それさへ分け乗りで、この先の電車といつたらもう言語道斷、漸くのり込んだ頃から、又雨がボツ／＼ふりましたので、私共が帝釋天から江戸川堤の花の下にまゐりました時は、全く天地と我々同行のみさなりました。只所々に辛抱強い茶店のおばあさんが、毛布にくるまつていました許り、しみじみと天地の氣を身にうけて歸りました。

四月二十九日 文二 逝く春をおふて中山から國府臺にかけて歩きました。風がつよい日で御座いましたけれど、若緑にまじつた八重櫻のながめが、どこでも私たちをはぐくむてくれました。八幡

きいてまゐりました。標本室にはおもしろい人形が澤山御座いました。夕方になつても止みませんでしたので、ぬかるみの中を不動様へだけまゐりました。雨にげぶつた目黒は蛙がいないので、何となくつかう御座いました。さもなくも放課後からさしては、割合よい計畫であつたと思つて居ります。

箱根旅行

五月十五日 文二 明るい朝の光は昨夜までの雨に濡れた若葉と、美しい楽しみに緊張して居る私共の心に流れて居ります。

下村先生、西村先生、御引率の下に午前六時五十分、東京驛を發して横須賀に行き、軍艦山城と造船所の様子を見、午後一時五十六分に鎌倉に向つて立ちました。葉櫻頃の古蹟の地は、静かでございます、尋ね行く寺々は當時の氣風をしのばせました。七里が濱の夕ぐれを、電車の窓から眺めて片瀬につき、長い棧橋を渡つて、夜の江の島に参りました、海は忘れ得ぬまでと、始終なつかしい波音を立て、居りました。
五月十六日 地理選修の者九名がこの朝早く、西

村、山川両先生に随つて、箱根見學の爲江の島を立ちまわりました、淋しい様なもの、こぢんまりした、好しい旅で御座います。

湯本に着いたのは、午後二時でございました、それからならかな道、早川の溪谷に沿つて底倉迄上つて、一日の旅程は盡きましたけれど、樹の匂水の音は何時迄も私等の行手に、つきまどふのでございました。

五月十七日、強羅を経、大地獄を見、更に蘆の湯を過ぎて駒が岳に登りました、海拔四千尺の火口丘の頂には、下界に知られない、可愛い花が咲いて居ります、しかもその許には幾重の山脈をひれ伏させて。今更に大きな山の力に對して、山でなくてはならない様な氣になりました。こゝから蘆の湖に向ふ斜面に下つて箱根宿の舊本陣に草鞋をぬぎました。午後五時でございました、流石にこの邊の箱根権現關所の跡、昔なつかしいものばかりでございます、丹前姿の先生の御講義も、今宵限りとなりました。

五月十八日、この曉、かなりの地震で目を覺まして仕まりました午前六時、氣温攝氏六度。氣壓七〇

十七日、知恩院、山陽の墓、圓山公園、高齋寺、清水寺、方廣寺
豊國神社、三十三間堂、
大坂着(午後一時) 憲兵隊本部、大阪城、京都へ

十八日、大津、石山寺、三井寺、京都へ歸り午後二時五十七分東
京へ、
十九日、曉東京の土を踏む、

伊勢、二見ヶ浦

伊勢の深嚴さは雨によつて更に増された、深い杉の色とうすみどりの霧、老木のかげの白い鶏、雨の中の千木、日本人ならで日本心ならで、この神宮の尊さ、嚴さを、誰が何うして知り得る事が出来よう、「解らない事が有つたら此所にさへ來れば」と人が云ふ、日本には此神宮があるのだ、私共はこれより外に力強きを感じる事は出来ない、これより以上の有難さはない。

二見浦も雨、十二日の朝早く舟二艘を出して、あの岩間をめぐり、遠く霞んだ志摩の山々は、夢よりも淡く見えた。

寧樂

春日野、雪解澤、何れも懐かしい名ばかり、けれ

四度。渚のそらあるきに素足の先が沁みる程の冷めたさでございませう。朝靄の消けきらないさかさ富士に船を浮めて湖尻へ渡りました、はるか湖心迄鶯の聲が聞えて參ります。湖尻から長尾峠へと北方外輪山を突破して、箱根舊道を御殿場へ出ました。そして私等の旅は終を告げたのでございませう。

關西旅行

日程

出發、五月十一日午後十二時東京驛、

十二日、山田着(午後三時半) 伊勢内外宮參拜、二見着(六時五十分)

十三日、二見發奈良着(午後一時十五分) 興福寺、博物館、東大寺、手向山八幡宮、嫩草山、春日神社、奈良女子高等師範學校、

十四日、奈良發叡傍着(午前七時四十五分) 神武天皇御陵參拜、法隆寺着(十時半) 宇治着(六時五十分) 平等院、

十五日、宇治發、桃山御陵參拜、京都着(九時半) 東西本願寺、葵祭、銀閣寺、南禪寺、インクライン、平安神宮、

十六日、御所拜觀、二條離宮拜觀、北野神社、金閣寺、等持院、仁和寺、大覺寺、野の宮、嵐山大井川、小督の局の墓、

其時間といふ現世の物が少なかつた爲に、殆ど徒歩競争であつた、三月堂にも入りたかつた、春日の奥も訪ねたかつた、東大寺の下に來た時に日本人はえらいんだ、日本人だつて小さかないんだ、この大きな氣前とこの巧さを、そのまゝ發達させたらと思つた、そして思ひきつて見上げて、大きく息をして見た、すべてがあんまり大きくなって、上許り向かなければならなかつたので、首が痛くなつてしまつた。五時頃から奈良の女子高等師範學校へ行つて、御手厚い御もてなしに與る、猿澤の池の傍の宿へ歸つたのは十一時頃。

法隆寺

千三百年前の古刹、それを現在眼の前に見た時に法隆寺の存在といふ物は、一つのミラクルの様には思はれた、そしてあの何とも云へない金堂と、五重の塔と中門と、苔に蒸し蒸された屋根、暗い寺の内剝落した壁畫等は、何れも此の世の物とは思はれなかつた、私達の外に誰も居ない、鳥の聲もしない、廣々とつゞいて居て、田畑にも小高い後の山にも、人